令和５年度
第２回　大野市文化財保護審議会
会　議　録

日　時　　令和５年９月５日（火）１３：３０～１４：１５
場　所　　学びの里「めいりん」　２階　洋室（中）

大野市文化財保護審議会

出席者　　○委員５名
　　○事務局３名

会長あいさつ

先日、福井県教育庁生涯学習・文化財課の無形民俗文化財担当者から、県内の無形民俗文化財の保存会の活動が弱体化しているところが多いと聞いた。

大野市では、９月２８日に開催される文化財対談会で「神子踊り」が披露されると聞いて、安心するとともに活発な活動に感心した。

披露する場を設けることは保存会の弾みにもなると思う。そうした機会を増やしていって欲しい。

協議事項

１　県外研修行程案について

【協議結果】計画案のとおり了承。

２　奥越史料第３７号の発刊について

【協議結果】執筆者は、国京氏（外部寄稿者）、黒田委員、高津委員の３名。ページ数が不足する場合は、杉本委員、石蔵会長が追加で執筆。
原稿提出期限を、１２月末とする。

３　勝山市・大野市文化財保護審議会合同研修会について

【協議結果】事務局案のとおりとし、以後は両市事務局で詳細を整える。

【協議】

事務局：勝山市文化財保護審議会事務局から、従来の両市文化財保護審議会合同研修会のあり方を変更し、事務局の意見交換としたい旨が伝えられた。理由は、次のとおり。

①勝山市文化財保護審議会の委員構成を改め、文化財の有識性を重視するようになっており、行政的な協議に向かなくなった。

②近年の協議事項が実務的なものが多く、事務局による説明に終始している。

事務局としては、この案は実用的なものと考える。なお、両市文化財保護審議会の交流の機会は維持し、文化財の保護・活用の大きな動きがあれば、都度、招待・訪問をするようにしたい。また、両市に関係する事項については、必要に応じて両市文化財保護審議会委員による現地視察を行うようにしたい。

この点については、勝山市の担当者の理解を得ている。

報告事項

1　文化財を楽しむ対談会

事務局：文化財保護審議会委員にチケットを用意している。個別にチケットを購入された委員も、文化財保護審議会委員として用意した席に着席していただきたい。なお、大野市文化財保存活用地域計画推進委員を兼ねて務めておられる委員は、地域計画推進委員の席に着席して欲しい。

2　国指定天然記念物「専福寺の大ケヤキ」について

事務局：専福寺の大ケヤキが治療を要することは第１回の審議会で報告をしたとおりのため、経過報告を行う。

先日、文化庁の調査官による現地指導を受けた。専福寺及び県・市の要望する事業内容が認められた。その他、土壌が固いことが樹勢を弱める原因となっていると指摘を受け、土壌改良を追加するようアドバイスを受けた。令和６年度の国庫補助事業として採択されるよう整えていく。

委員：土壌改良はどのように行うのか。

事務局：水圧穿孔法（水圧の力を利用して、土の中に空間を作り土壌をほぐす方法）で行うことで、根を傷つけないようにする。

その他

1　中部縦貫自動車道の開通の見込みについて

委員：中部縦貫自動車道の勝原インターチェンジ以東の開通はいつか。

事務局：まだ公表されておらず、把握できていない。

2　高山祭について

委員：高山市での県外研修と、高山祭との関りはどうなるのか。

事務局：高山祭当日は混雑することが見込まれ、円滑な視察の妨げになると思われるので、開催日を避けて訪問する。

令和５年度

大野市文化財保護審議会　県外研修

（岐阜県　高山市・美濃市）

【日程】　令和５年■月■日（■）・■日（■）

【行程】

【出発】大野市役所 8:00
（2：00）
【車内】向牧戸城跡 10:00 10:00
（1：00）
【見学】松倉城跡 11：00 12：00
（0：10）

【昼食】■ 12:10 12:45
（0：15）
【訪問】素玄寺（要連絡） 13:00 13:40
（0：15）
【見学】高山城跡 13:55 15:00
（0：05）

【見学】飛騨山王宮日枝神社（要連絡） 15:05 15:40
（0：10）
【見学】飛騨高山まちの博物館（要連絡） 15:50 17:10
（0：05）
【宿泊】■ 17:15

【出発】■ 8：15
（0：15）
【見学】高山陣屋 8：30 ―
【自由散策】古い町並み ― 11：30
（0：20）

【昼食】■ 11:50 12:15
（1：10）
【車内】小倉山城跡 13:25 13:25
（0：10）
【見学】旧今井家住宅・美濃史料館 13:35 ―

【自由散策】うだつの上がる町並み ― 15：15
（0：05）
【車内】上有知湊（川湊灯台） 15：20 15:20
（1：55）
【到着】大野市役所 17:15

向牧戸城　（むかいまきどじょう）

高山市指定文化財

堀切	腰郭	主郭

立地・構造

庄川と御手洗川に挟まれた小丘陵突端（比高 40m）に築かれた丘城。南以外の三方向は庄川と御手洗川を自然の濠とした段丘崖で区画され、南側の丘陵基部を堀切で分断して城域を区画していたと思われる。頂部に構築された主郭は 20m 四方ほどの方形郭で、周囲は帯郭で囲郭され、南側に堀切を挟んで二の丸が設けられていたようである。

城域は狭小で兵の駐屯能力は低く、また恒常的な居住空間とは想定できない。同地が越中・飛騨・郡上に繋がる街道が交錯する要衝に位置することから、本来はこれを監視する目的として築かれた城砦と推測される。

歴史・沿革

宝徳・長禄年間（1449～60）頃、将軍足利義政の命により飛騨国白川郷に入封した（とされる）内ケ島為氏が「白川郷」の南口を守備するために築いたと伝えられ、内ケ島氏の家臣・川尻氏が代々在城したとされる。内ケ島氏は天正 4 年（1576）越前の一向一揆勢力が織田軍に鎮圧された頃、織田信長に近づき、同 6 年（1578）からは富山城主・佐々成政の越中制圧に与力した。

天正 13 年（1585）、羽柴秀吉は飛騨三木氏攻めを越前大野城主・金森長近に命じる。大野口から飛騨に侵入した金森勢が最初に攻めたのが川尻氏信の籠もる向牧戸城だった。城は容易に落ちず、郡上八幡城主・遠藤慶隆の支援を受け、また領民を懐柔して内ケ島勢の兵糧道を断ち向牧戸城攻略に成功した。

松倉城　（まつくらじょう）

岐阜県指定文化財

本丸	本丸石垣	三の丸石垣

立地・構造

高山盆地を見下ろす松倉山（標高 856m 比高 280m）に築かれた山城。規模は東西 200m×南北 120m ほど、城縄張りは頂部を加工した主郭を中心に東側の二の丸、南側の三の丸からなるシンプルな連郭構造。規模は主郭が 20m 四方、二の丸が東西 30m×南北 10～15m、三の丸が東西 50m×南北 10～20m ほど。西側稜線を堀切で断って城域を独立させる。

城の中枢部の石垣は中世に一般的だった野面積だが、角部は加工したと思われる石墨が使用され、隙間に詰石がなされ、中世城郭から近世城郭への転換期の遺構と推測される。比較的狭小な城郭だが、内部に井戸が設けられるなど、有事の際の「避難城」、番将を配した「物見砦」として機能したと思われる。

歴史・沿革

戦国中期以降、北飛騨は高原諏訪城主・江馬氏が、中飛騨は飛騨国司・姉小路氏が、南飛騨は新興勢力の三木氏が領国化し、周辺の国衆や村地頭等を被官化していた。三木氏が頭角を現すきっかけは、応永 18 年（1411）に勃発した「飛騨国司姉小路氏の内訌」とされる。

三木自綱は織田信長と結んで勢力の安泰を図り、天正 7 年（1579）頃、松倉城は自綱により築かれたとされる。同 10 年（1582）の「本能寺」の後、自綱は越中国主・佐々成政と結んで羽柴秀吉と対峙したが、同 13 年（1585）の「富山の役」で成政は秀吉に降伏。同年、秀吉は越前大野城主・金森長近に飛騨征討を命じた。自綱は松倉城に次子の秀綱を据えて金森勢と対峙したが、金森勢の猛攻を防ぎきれず、秀綱は遁走し松倉城は陥落した。

高山城築城に伴い廃城になったものと思われる。

素玄寺　（そげんじ）

山門	本堂	庭園

慶長 13 年（1608）、初代高山城主・金森長近が死去し、その菩提寺として、2 代金森可重が建立。長近の法号「金竜院殿前兵部尚書法印要仲素玄大居士」に因んで素玄寺と名付けられた。

長近所用の鶴毛陣羽織、軍扇、采配、長近肖像などの指定文化財やその他宝物がある。

（１）素玄寺本堂（市指定文化財）

書院造りの主殿造り。寛永 12 年（1635）、火災により本堂・庫裡を焼失したため、金森 3 代重頼が高山城二之丸にあった評議場を移築して本堂とした。

本堂の裏手には金森家歴代の霊牌を祀る霊廟（今は壇信徒各家の位牌堂を兼ねる）がある。

（２）松倉観音堂

本尊は 8cm 余りの小さな木彫馬頭観音で、元は松倉城主・三木自綱が兜に納めていた守り仏であったと伝えられている。

（３）庭園（市指定文化財）

山麓を利用して渓流、滝、池をあしらっている。

庫裏の表座敷、裏座敷、茶室にまで及ぶ幅の広い庭で、建物に添って南北に幅の狭い池が長く連なっている。この池に向って中央と北端とに渓流が注ぎ滝となっている。この 2 つの渓流の間を飛び石伝いに築山へ上れるようになっている逍遙道があり、一周して座敷へ帰れるようになっている。寺院裏の山林を借景としていることが、この庭の背景をよくしている。

大きな石がさりげなく使われており、庭石の配置、池や石橋なども立派で飛騨では数少ない名園である。

高山城　（たかやまじょう）

岐阜県指定文化財

立地・構造

高山盆地の中央部、宮川と江名子川に挟まれた丘陵突端（通称城山　比高100m)に築かれた平山城。規模は東西450m×南北600mほど、山頂部の本丸を中心に南側下に南の丸を、北麓に二の丸・三の丸を配したシンプルな構造。規模は本丸が東西100m×南北40m、二の丸の庭樹院殿屋敷が100m四方、二の丸屋形が東西100m×南北80m、三の丸が東西100m×南北120m、南の丸が25～30m四方ほど。

本丸は東西2段の複郭構造で、西上段に本丸屋形や二層三階の天守櫓が、東下段に横櫓、太鼓櫓、十間櫓、十三間櫓が曲輪全体を囲うように構築し、北側に搦手門が、南側に大手表門を設けていた。二の丸は若干段差のある東西の複郭構造。東側の郭に庭樹院殿屋敷を設け、北東隅に鬼門櫓が、南東隅に東丸長屋、裏門を設け、南西隅に大門を構えていた。また西側の郭に二の丸屋形、黒書院、十間櫓を設け、東側に設けた中の口門で庭樹院殿屋敷と繋げていた。三の丸には米蔵や勘定場を設け、北・東側には濠を巡らしていた。

高山城下は高山城の北麓に設けられ、東縁に寺院を集中的に配して有事の際の砦とし、また宮川と江名子川を自然の濠としていた。

歴史・沿革

文安年間(1444～49)、飛騨国守護代・多賀出雲守の築城と伝えられる。明徳2年(1391)、京極高詮は「明徳の乱」で軍功をあげ、飛騨国守護職に任ぜられた。守護代として多賀出雲守が下向し、飛騨国司・姉小路氏に対する拠点として天神山城が築かれ、永正年間（1504～21）以降、多賀氏の一族・高山外記が在城したと伝えられる。戦国中期、飛騨国南部を制圧した三木氏は北侵を推し進め、天正13年（1585）頃、飛騨統一を成し遂げたが、佐々成政に加担したために秀吉の命を受けた金森長近によって討伐された。

飛騨一国の仕置を任された長近は、天正16年（1588）、天神山城を拡張整備して近世城郭・高山城につくりかえ、拠点とした

元禄8年（1695）、飛騨が天領となり高山陣屋が設置されると高山城は破却された。

飛騨山王宮 日枝神社　（ひださんのうぐう ひえじんじゃ）

旧高山城下町南半分の氏神。春の例祭（山王祭）は高山祭として知られる。

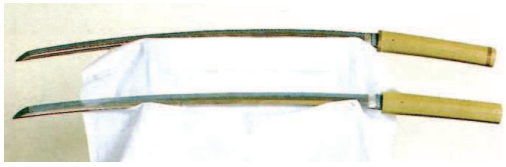
祭神

大山咋神

由緒と歴史

永治元年（1141）	三仏寺城主・平時輔、片野・石浦境の山上に近江坂本より「日吉山王宮」を勧請。
養和元年（1181）	木曾義仲の兵火にかかり日吉社を焼く。片野の里人、杉ケ平にご神体を移し片野村の産土神とする。
天正 13 年（1585）	金森長近、飛騨一国を平定。
天正 16 年（1588）	金森長近、築城及び城下町造営に着手。
慶長 5 年（1600）	金森長近、杉ケ谷神明宮を再建する。 二代金森可重、長近の命により日吉山王宮を杉ケ平より現在地へ奉還。社殿を造営し城の鎮護神及び国府の産土神と定める。

長近着用緋羅紗陣羽織

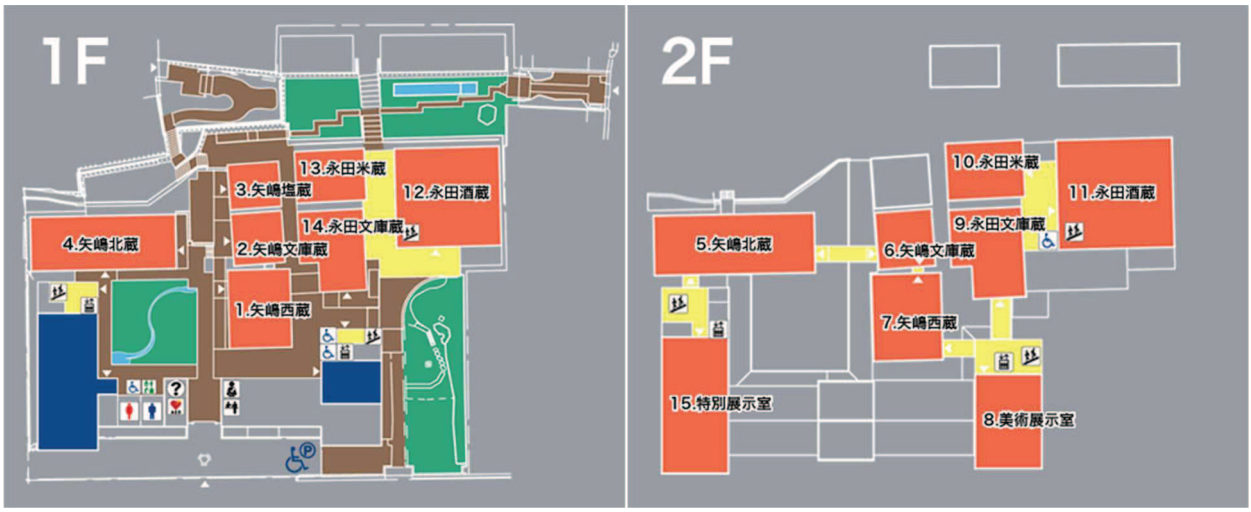


長近佩刀

飛騨高山まちの博物館

高山の魅力を身近に感じてもらえるよう、高山城下町の歴史や、その中で育まれてきた美術工芸、伝統文化などを紹介しています。

展示室は江戸時代の豪商、矢嶋家と永田家の土蔵を活用しています。
矢嶋家は、江戸時代初期に近江から移り住み、材木や塩の商いをしながら「町年寄」として江戸時代を通じて商人町を治めていました。
永田家は屋号を「大坂屋」といい、明治初年には高山一の田地をもち、酒造りなどをしていました。酒蔵は高山で最も大きな蔵の一つです。



1　まち博へようこそ
城下町高山のなりたちや、高山を代表する文化、まち博の由来。

2　高山祭
匠の技術と町人文化の結晶である屋台と、それを守り伝える人々の営み。

3　高山の町並と「飛騨の匠」
高山の町並と町屋や寺院の紹介、古代から受け継がれてきた「飛騨の匠」の技。

4　城下町高山
高山城と城下町の整備にはじまる、高山の町の歴史。

5　金森氏六代
今日の高山の基礎をつくった金森氏六代の足跡。

6　飛騨地方の自然・行事
飛騨地方の自然や伝統行事。（映像）

7　伝統行事
地域の絆を育んできた年中行事や祭の芸能。

8　美術
高山にゆかりのある作家の名品を通じて、飛騨の美術の系譜。

9　信仰
生活の中で信仰されてきた円空仏の魅力と、人々との関わり。

10　暮らし
高山の町人が使用したさまざまな道具や生活用具。

11　学問・文芸
町人学者や地役人などの活躍により盛んになった高山の学問・文芸。

12　大火と防災
幾度もの大火から学んだ町家の防災や町並保存の知恵と歴史。

13　伝統工芸
春慶・一刀彫・焼物などの名品と現代の作品を展示し、伝統工芸の歴史。

14　産業
各時代の主な産業から高山の経済を支えた基盤。

・高山フルコース
展示室 1～14（約 2 時間）

・歴史の概要を知るコース
展示室 4、3、2、1（約 40 分）

・伝統文化に触れるコース
展示室 1、7（約 20 分）

・文化芸術にふれるコース
展示室 13、9、8（約 45 分）

高山陣屋　（たかやまじんや）

国指定史跡

高山城主金森氏の下屋敷の一つ。金森氏の出羽国上山への移封後による幕領化で、陣屋となる。

クレ葺屋根の門の扉に残るしみは梅村騒動で農民に殺された門番の血痕といわれている。

内部には、御役所、御用場、大広間、役宅、吟味所、白州などのほか、裏手には、高山城三の丸から移した御蔵（米蔵）8 棟も昔のまま残されている。かつて年貢米を保管した蔵で、幕領時代の資料が展示されている。

明治に入ってからは、県庁、郡役所、支庁、県事務所など代々、地方の役所として使われてきた。郡代役所の建物が残っているのは全国でも高山だけである。

古い町並み

国選定重要伝統的建造物群保存地区

城下町の中心、商人町として発達した上町、下町の三筋の町並みを合わせて「古い町並」と呼んでいる。出格子の連なる軒下には用水が流れ、町家の大戸や、老舗ののれんが連なっている。

■町屋の特徴■

前側の屋根の高さは 4m 少しと低くなっている。屋根は道路の水路まで飛び出て、屋根から落ちた雨水がちょうど水路に落ちるようになっていた。そのため、屋根の軒先がきれいに揃っていたが、雨樋が取り付けられたことにより、今は軒先は揃わなくなった。

道路に面した部屋はミセといって商品を陳列する部屋で、80 年から 90 年ほど前に商店をやめたところが多く正面に格子を取り付けた。この格子が、高山の町並みの特徴となり、日本有数の商家群保存地区となっている。

【参考】

高札場跡
町年寄 屋貝氏宅跡
岩佐一亭旧宅
山桜神社の火の見櫓
鍛冶橋
右衛門横町
加藤歩簫蘭亭跡
日下部民芸館
吉島家住宅
田中大秀叢桂園跡
高山市図書館 煥章館
川上別邸史跡
町年寄川上氏宅跡
町会所跡（高山市政記念館）

【参考】真宗大谷派 高山別院 照蓮寺　（しょうれんじ）

建長 5 年（1253）

親鸞の教えを受けた嘉念坊善俊（後鳥羽上皇の子、又は孫と伝えられる）が飛騨国白川郷に「正蓮寺」を建立。飛騨国の浄土真宗は一大勢力となる。

長享 2 年（1488）

帰雲城城主・内ヶ島為氏により焼き討ちにあう。

永正元年（1504）

内ヶ島為氏と和睦し、飛騨国白川郷中野に寺院を復興。「照蓮寺」と改称。

天正 16 年（1588）

内ヶ島氏との和睦により勢力が拡大。恐れた金森長近は、高山城下の現在地に移転させる。移転後、金森氏と手を結び、勢力を拡大していく。

長近の不在時、代わって照蓮寺が高山の町を治めた。

寛永 18 年（1641）

宣心（第 3 代藩主金森重頼の三男、金森従純）は、東本願寺十三代宣如の六女の佐奈姫を迎え入れ、本山との関係を濃くする。

正保元年（1644）

宣心は照蓮寺第十五世を継ぐと、さらに金森氏と密接となる。

元禄 5 年（1692）

飛騨国が天領になったことで後ろ楯を失い、一気に衰退する。さらに宣心の死後、末寺との間に軋轢が生じ、衰退の一途をたどる。

元禄 16 年（1703）

照蓮寺第十七世の一乗はこの事態を打開するため、「照蓮寺」を本山に献上し、本山の掛所「高山御坊」となる。

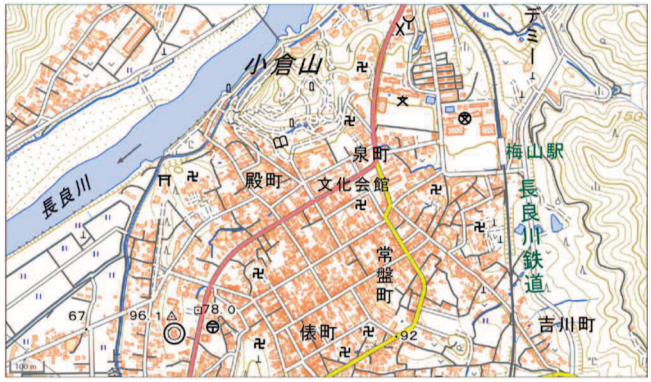
小倉山城　（おぐらやまじょう）

虎口の模擬櫓

模擬天守風展望台

展望台南側からの美濃市街地

立地・構造



濃尾平野の中央北部、長良川左岸の独立丘陵・小倉山（標高 160m 比高 60m）に築かれた平山城で、山頂部の物見（か？）と南麓部の居館（本城域）からなる。規模は東西 300m×南北 300m ほど、本城域は北から南方向にかけて三段の平場になっており、現在、本丸～小倉公園、二の丸～駐車場、三の丸～一般の民家宅地になっている。本丸の規模は東西 150m×南北 150m ほど、現在は南西端に模擬櫓が復元されている。山頂部は 10m 四方ほどの小空間で要害性は薄く、物見に利用されていたと思われる。

歴史・沿革

慶長 5 年（1600）の「関ヶ原の合戦」の際、東軍に加担した高山城主・金森長近は、戦後、美濃国武儀郡 2 万石を加増され、同 10 年（1615）、養嗣子の可重に家督を譲ると、新たに小倉山城を築いて実子の長光とともに移った。同 12 年（1617）、長近が死去すると、可重は長光に 2 万石を分知したが（上有知藩立藩）、同 16 年（1621）に長光が嗣子なく夭折したため、上有知藩は改易となった。その後、同地は天領を挟んで尾張徳川藩領となり、小倉山城は破却されて城址に尾張藩の代官所が置かれた。

旧今井家住宅・美濃史料館　（きゅういまいけじゅうたく・みのしりょうかん）

美濃市指定文化財

旧今井家住宅は、美濃市で最も古いうだつが上がる、庄屋兼和紙問屋であった町家。江戸時代中期に建てられ、明治初期に増築されたと言われており、市内最大級の間取りとなっている。増築時には天井からの高さが約3mある明り取りも作られた。

奥には美濃市の古い歴史、文化、造形物に関する史料を展示した美濃史料館やうだつ蔵、にわか蔵がある。

うだつの上がる町並み　（国選定重要伝統的建造物群保存地区）

江戸時代から続くうだつの上がる家が並ぶ町並み。

「うだつ」は、江戸時代、火事の際の類焼を防ぐためのものだったが、当時の豪商たちがその富を競い合うようにそれぞれ立派なうだつを設けた。

小坂家住宅 鬼瓦を持たないうだつ軒飾りは珍しく、小坂家だけの特徴。とりぶすま、二枚の破風瓦、簡素な懸魚で構成されている。	松久家住宅 旧今井家のうだつより少し発達したうだつ軒飾り。屋号を表す鬼瓦が少し立派になり、破風瓦の下に簡素な懸魚が付く。	加藤家住宅 破風瓦が「人」型ではなく、傘形となっていて、懸魚があっさりとしていて調和のとれたデザインとなっている。	平田家・古川家住宅 最も新しい形式の軒飾りとして、明治の初期につくられた。他の軒飾りと比べ一段と装飾的にデザインされている。

上有知湊（川湊灯台）　（こうずちみなと）

岐阜県指定史跡

長良川畔の上有知湊は金森長近によって開かれた。

長近は関ケ原戦の功によりこの地を加封されると、小倉山城を築き、低地にあった上有知の町を丘上に移して、城下町上有知の町づくりを行った。さらに町の繁栄策として六斎市を開かせ、物資運送の玄関口として上有知湊をひらき、番船40艘をおいて長良川下流への舟運の拠点とした。上有知湊は江戸時代から明治時代末年までこの地方の物資の流通、交通の中心として繁昌したが、明治44年、電車の開通によって全く廃れてしまった。

今はわずかに、かつての上有知湊を象徴するかのように川畔に建つ高さ 9m の長良川港灯台と舟着場への石段、舟運の安全を祈るために奉祀された住吉神社、文化年中に郡上連中が奉献した石灯籠などが昔を物語る姿をとどめるだけである。

＜六斎市＞

室町時代から江戸時代にかけて月6回開かれた定期市。

六斎市の呼称は当初仏教関係行事※と関連して市が開かれたことに由来するものと考えられるが、商品経済の発展に伴って全国的に月3回の日切市（日ぎめの定期市）である三斎市が、月6回の定期市に発展。

史料上では南北朝初期と推定される常陸国国府（茨城県石岡市）六斎市、室町時代の応仁・文明年間（1467～87）の美濃国大屋田（岐阜県美濃市）の紙市、山城国宇治郷（京都府宇治市）市が早い例で、戦国時代には諸大名の城下町や新宿の建設、市町振興などの目的で、多くの六斎市が開かれ、保護された。

応仁の乱後は六斎市が一般化され、当時の荘官や農民たちは、これらの市で農産物を売却して、貨幣を入手した。これにより、それまで年貢として領主におさめられていた農産物の多くが商人の手に渡り、商品として流通するようになった。

※六齋（ろくさい）

「摩訶般若波羅蜜經」

佛告須菩提。如是如是。是善男子善女人。若六齋日。月八日二十三日十四日二十九日十五日三十日。在諸天衆前説是般若波羅蜜義。是善男子善女人得無量無邊阿僧祇不可思議不可稱量福徳。

（仏陀が須菩提（スブーティ）に言った。「このように毎月6日間、8日、23日、14日、29日、15日、30日に、すべての神々の前で般若波羅蜜多を説けば、善男子・善女人は無限の福徳を得る。」）